

漢語近世音のはなし---(4)「歌・可・河」の韻母

中村雅之

§ 12、/o/か/a/か?

「歌・可・河」など、日本漢字音で「-a」(ア段)となり、現代北京音で/a/[ʌ]となるグループは、等韻学の用語を用いれば果摂一等開口に分類される。これらの韻母は中古音では/a/であり、現代北京音では/a/となっているが、それでは近世音はどうかという、かつては円唇母音/o/と考えるのが一般的であった¹²。つまり/a/ > /o/ > /a/という変化を想定したわけである。その根拠はおそらく、『蒙古字韻』等におけるパスパ文字表記で果摂一等の韻母が「o」と転写すべき文字で記されていること、そしてニコラ・トリゴー編『西儒耳目資』(1626)でもローマ字で「o」と表音されていることであろう。しかし、北京音では元明代においても、「歌・可・河」の韻母は現代音と同様に/a/であったと思われる。以下、それについて述べる。

§ 13、エドキンズの証言と『西儒耳目資』の表記

19世紀の英国人で、漢語史と漢語方言の研究に多大な貢献をしたジョゼフ・エドキンズ(Joseph Edkins)は、その著『官話文法』¹³において各地の音声について詳しく記述している。それによれば、標準的な官話(南京官話)では、「歌」など果摂一等開口の韻母は英語「lot」の「o」と同様の音と説明される(5頁)。つまり円唇母音である。これに対して、黄河以北の多くの地域では、官話の「o」が「ü」と発音されるとしており、その「ü」については次のような説明がある。

ü as in u in *but* pronounced long (5頁)

like the first vowel in the diphthong of the word such as *how* (49頁)

ともに非円唇母音/a/を意図していると見なしてよいであろう。つまり、果摂一等開口の韻母は南京官話では円唇母音、北京周辺では非円唇母音ということであり、要するに現代の南京と北京における音価と違いがない。

12 代表的なのは、『中原音韻』の再構音として最もしばしば利用されている楊(1981)である。

cf. 楊耐思(1981)『中原音韻音系』, 北京: 中国社会科学出版社。

13 Edkins, Joseph(1857, 1864²), *A Grammar of the Chinese Colloquial Language, commonly called the Mandarin Dialect*, Shanghai: London Mission Press. 一般に『官話文法』という訳名が通用している。

エドキンスよりも少し遡った明末の『西儒耳目資』においても、「歌ko」などの表記は官話の円唇母音を表したものと見て差し支えないであろう。特に、果摂一等の開口と合口を区別せずに「-o」と表記する部分（「箇ko」＝「過ko」）を含むことは南京音が強く影響した証拠であり¹⁴、『西儒耳目資』などの西欧宣教師資料をそのままの形で北方近世音の音価推定に用いるのは適当ではない。

§ 14、明清時代のハングル資料

漢語音をハングルで記した資料は明代から清代にかけて数種が存在するが、代表的なのは漢語の会話教科書であった『老乞大』と『朴通事』に付された音注である。合わせて「老朴」と称されるこの会話教科書は、14世紀の高麗時代に作られ、その後何度か改訂されて多くのバージョンが生まれた。16世紀初頭には崔世珍によってハングルによる音注と朝鮮語訳が付され、17～18世紀にはさらに漢字本文およびハングル音注に改訂が加えられた。

これら一連の「老朴」におけるハングル音注では、問題の果摂一等開口は「歌ge」「可ke」「何he」と転写されうる文字で記されている¹⁵。「e」の当時の朝鮮語における音価は通常[a]であると見なされているから、単純に考えれば、それによって表される漢語音も非円唇母音であったことになる。その漢語が北京のものか、あるいは遼寧省あたりのものか、にわかには決定はできないが、北京音と大きく違わないものと考えて大過ないであろう。

なお、ハングルの「e」が当時すでに現代語におけるような[ɔ]に近づく傾向を持っていたと想定して、「e」で漢語の円唇母音[ɔ]を表したのだとする解釈も全く不可能ではない（その場合、「歌」などの韻母は[ɔ]であったことになる）。しかし、『蒙語老乞大』などに見える清代のモンゴル語では、ハングル「e」をモンゴル語の男性母音/o/[ɔ]ではなく、女性母音/ä/（[ə]～[ɜ]）に当てて表記していることを考慮すれば、明清時代にお

14 西欧人は一般に南京音を官話の標準発音と見なしたが、『西儒耳目資』においては南京以外の地域の官話も考慮して表記がなされており、「過」などの果摂一等合口字については南京風の発音「ko」のほか、他の多くの地域の「kuo」という発音も同時に採用されている。

15 ハングルの転写方法は、河野六郎方式による。

cf. 河野六郎(1947)「朝鮮語ノ羅馬字轉寫案」『Tōyōgo Kenkyū』2;『河野六郎著作集』1(平凡社1979)所収。

なお、いわゆる「翻譯老乞大・朴通事」において個々の漢字に付されたハングル注音については次の書で容易に検索できる。

cf. 遠藤光暁(1990)『《翻譯老乞大・朴通事》漢字注音索引』, 東京:好文出版。

ける朝鮮語の「e」は[a]であって、漢語においても非円唇母音を表したと考えるのが穏当であろう。

あるいはまた、朝鮮語の「e」を[a]と認めた上で、それを漢語の[o]に対応させたという解釈もあり得る。しかしこの解釈をとるためには、北京語の「歌・可・何」が円唇母音を持っていたことを示す他の資料が必要である。少なくともハングル表記は明清時代の北京語における果摂一等開口の韻母を円唇母音とする根拠とはなりえない。19世紀のエドキンズが記した状況(=北京音では非円唇/-ə/、南京官話音では円唇/-o/)を明代にまで遡らせることは、それほど無理な想定ではない。とりわけ、次節に述べるように、元代北京音において果摂一等開口が/-ə/であると考えられる場合には、尚更である。

§ 15、元代と明初のモンゴル語漢字音訳

13～14世紀のモンゴル時代には、漢字音訳によってモンゴル語を表記した資料が大量に存在した。最も有名なものは明初に成った『元朝秘史』であろう。同時期の『華夷訳語』(甲種本)とともに、非常に精密な表記によってモンゴル語を記している。一方、元代のモンゴル語語彙集『至元訳語』(別名『蒙古訳語』、『事林広記』所収)や『元典章』、皇帝聖旨などにも相当量の漢字音訳モンゴル語が見られる。

これらの資料が漢語音韻史を考慮しつつ対音資料として利用されたのはすでに半世紀以上も前のことで、服部(1946)¹⁶と長田(1953)¹⁷によってであった。前者は『元朝秘史』を対象とし、後者は『至元訳語』を対象としている。長田(1953)では『至元訳語』において果摂一等開口の「哥」「可」がモンゴル語/gä/、/kä/に当てられていることから「哥」「可」の元代音を[kə][k'ə]とした。つまり非円唇母音としたわけである。同時期の『中原音韻』で一般に[ko][k'o]が推定されるのと対立している。

長田氏の見解は学説史上、非常に重要な点を含んでいるが、残念ながらその説の価値は長い間十分に理解されなかった。長田説を再評価したのは吉池(2005)¹⁸である。吉池氏は、『至元訳語』など元代の資料で「哥」「可」がモンゴル語/gä/、/kä/に当てられ、一方『元朝秘史』など明初の資料では「哥」「可」がモンゴル語/gö/、/kö/に当

16 cf. 服部四郎(1946)『元朝秘史の蒙古語を表はす漢字の研究』, 文求堂。

この書は『元朝秘史』ならびにその漢字音訳の研究にとっては重要文献であるが、漢語音韻史に関わる記述については、現代から見れば修正すべき点がある。

17 cf. 長田夏樹(1953)「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」『神戶外大論叢』第4巻第2・3, 『長田夏樹論述集(上) 近代漢語の成立と胡漢複合文化』(ナカニシヤ出版, 2000)所収。

18 cf. 吉池孝一(2005)「哥葛などの元代音について」『KOTONOHA』36。

てられるという長田(1953)の指摘を受けて、その扱いの違いが漢字音の基礎方言の違いである可能性を示唆した。すなわち、漢字音訳によってモンゴル語を記す際に、どの地域の漢字音によるかでモンゴル語音との対応が異なっているというのである。これを本稿の立場で述べれば、『至元訳語』など元代資料は大都(北京)音により、『元朝秘史』など明初の資料は南京音によったということになる。14世紀における果摂一等開口の韻母は、北京音では非円唇の/-ə/、南京音では円唇の/-o/であったと考えられる。

特に重要なのは次の点である。果摂一等について、『至元訳語』では開口と合口の違いが明瞭であり、開口はモンゴル語/-ä/に当てられるが、合口はモンゴル語/-ö/に当てられる。一方、『元朝秘史』では果摂一等の開口と合口は全く同列に扱われ、ともにモンゴル語/-ö/に当てられている¹⁹。これは現代まで通じる、北京音と南京音の特徴でもある。北京では開口/a/[ɤ]、合口/ua/[uo]であるのに対し、南京音ではともに/o/[o]となる。つまり、元代から現代に至るまで、果摂一等の音価には大きな状況の変化はなかったと考えられるのであって、元時代の北京語において、「哥」「可」などに/-o/を想定するのは困難である。

§ 16、パспа文字の「-o」

吉池(2005)ではさらに重要な指摘がなされた。これまで果摂一等に円唇母音を推定する根拠の一つとされたパспа文字表記の「-o」についてである。この文字は本来円唇母音を表記する文字で、実際、モンゴル語の/o/を表記しているが、漢語においては、果摂一等の/a/[ɤ]を表記できる適当な文字がなかったために、次善の策として「o」が用いられたという。半狭の後舌非円唇母音は、モンゴル語にも、チベット語(チベット文字はパспа文字の主要材料)にもなかったため、後舌という共通項によって「o」を採用したということであろう。つまり、この解釈によれば、パспа文字表記を根拠として、漢語の果摂一等を[-o]とするのは妥当ではないということになる。

以上、「哥・歌」「可」「何」などの果摂一等開口の北京音が元代以来、非円唇の/a/[ɤ]であったこと、そしてこの点で南京音と明瞭な対比を示すことについてを述べた。

19 15世紀のいわゆる乙種「華夷訳語」の諸巻においては、多くの場合、果摂一等開口字は外国語の音訳としては避けられているようである。北京音と南京音とで混乱を生じないようにとの配慮であろう。